

岩手県立産業技術短期大学校長

太田原 功



教育について考える

盛岡市は東北の小京都と呼ばれることがあります。その落ち着いた雰囲気求めて、訪れる観光客も年々増加している様子であります。スキースキー愛好者であれば、安比スキー場や雫石スキー場への玄関口としての盛岡市、といったほうがわかりやすいかもしれません。その盛岡市の南隣に位置する矢巾町に、岩手県立産業技術短期大学が平成9年4月に開校されました。JR盛岡駅から、南へ3つ目の矢巾駅から約1.5キロメートルの位置にあります。

さて、「21世紀は、学歴ではなく、学習歴が問われる社会である」といわれております。学歴ではなく学習歴が問われる社会は、技術の分野では珍しいことではなく、古い歴史と実績を持っております。技術社会の多くは、昔からそして将来ともに学習歴社会であり、生涯学習の社会であるでしょう。技能士社会における師匠と弟子という教育形態は、人間関係を基本として技術を伝承する優れた教育形態の一つであります。幅広い視野を持たせるために、技能士社会にも近年盛んに学校制度が取り入れられておりますが、人間関係を尊重する師弟関係と、広い視野の学習を意図した学校制度との、調和のとれた教育が強く求められていると思います。

平成6年から高等学校の指導要領が変わり、多様化した高等学校から多様化した学生が大学に入学する時代になっております。近々、小学校や中学校の指導要領も大幅に変わろうとしております。それに伴って、工学系大学入学者の、数学や理科を主体とした学習不足の傾向はさらに深刻になるでしょう。入学した学生に目的意識がほとんどなかったり、あっても希薄な場合があります。そのような学生にも、技術に対する興味を深めさせ、技術の能力を発掘し、それを育ててやるのが、これからの教育者の大事な役割でありましょう。能力開発系の教育機関は実学・実践を重視した教育姿勢を貫いております。こ

のような理論と実験・実習の融合した教育が、上述の学生をも含めて、学生の興味を啓発し、学習意欲を鼓舞するものとなってほしいものです。

能力開発系教育機関の教員と、文部省系の教員とは選考の方法が違いますので一律には論じられませんが、近い将来、新しい指導要領で学んできた学生を指導するために、しっかりとした教育方法の習得が両者の教員に不可欠ではないでしょうか。大学が大衆化し、「師の背中を見て学べ」という教育方法は通用しなくなったという見方があります。しかしながら、個人指導主体の卒業研究や、少人数クラス編成における教育では、教員の側から学生の個性がよく見えると同時に、学生の側からも「師の背中を見て学ぶ」機会が多くなり、教員の専門性が教育効果に大きな影響を及ぼすことになるでしょう。教員は大いに心すべき問題であります。

自分が学んだ学校を母校と呼びます。その名にふさわしい母なる母校でありたいものです。困ったときや悩んだときにふと母校を思い、ふと恩師を思う。そして、何気なく母校に足が向き、母校を眺め恩師と言葉を交わして戻っていく。学校が、卒業生にとってそのような機能を持てるなら、素晴らしいことだと思います。先生方の、心のこもった教育がそれを可能にするはずであります。

技能と技術は一体のものであるとの観点から、本文ではこの用語を混用したことをお許しください。

おおたわら いさお
略歴 昭30 岩手大学工学部電気工学科卒業
(株)東京機械製作所入社
昭32 岩手大学勤務、47年工学博士、51年教授、
54年文部省在外研究員(英国リーズ大学、
米国UCバークレー校などに1年間滞在)
平7 岩手大学学生部長
平9 岩手大学停年退官、現職に就任